RPGの世界に入っちった

キッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＲＰＧの世界に入っちった

【Ｎコード】
Ｎ６７４８Ｚ

【作者名】
キッド

【あらすじ】
俺はゲームをしていた筈だ、なのに何故ゲームの中にいる！
『どんどん行こうぜ』
なＲＰＧストーリー

もし、ゲームの世界に入ったら、君ならどうする？

初オリジナル、正直不安だ

ヒ

もし、ゲームの世界に入ったら、君ならどうする？

ヒロ

自分は幸せの白い粉（わからない人は親に聞こう）など絶対していない
自分が言うのもなんだが、真面目に入るだろう
だが、何か眩い光がいきなり光ったかと思ったら
外にいた
「は？」
さっきまで室内に居たはずなのに
多分自分は間抜けな顔をしてるだろう
（いきなりなんだ！？）
バサッバサッ
うん、あんな鳥は日本にはいない
だって迷彩柄なのだから
おかしい、自分は自室で最新ゲーム機ＲＩＩ（リィー）の電源を入れたはず
自分の格好をみると電源を入れたときの格好だジーパンにフード付きトレーナーだ、ファッションとか考えないし
少し周りを見渡せばすぐにわかった
（なんでＲＩＩでやった『パディアルクの復活』の中にいんだよ）
理由は不明、原因も不明、不明だらけ、
ただひとつ、明日から冬休みで良かった
「ヒロキ・・・・だよね？」
名前を呼ばれたから振り返ると
「タ、タクミ？」
俺より身長が少しデカくて、同じ中学だったタクミがいた、学ラン姿で
「なんで此処にいんだよ、家でゲームしてたのに」
「タクミ、多分ここはパディアルクの復活の中みたいだ」
「マジかよ！！！」

かなり驚いてる、当たり前か
「ヒロキ！タクミ！」
「「ジュンヤ！？」」
俺と同じ位の身長で同じ中学だった、ジュンヤがこっちに走ってきた、ブレザー姿で
「なんだ？三人ともここにいたのか」
「「「レンヤ！？」」」
コイツは中学から俺と同じ学校に通う奴だ身長は俺より小さいブレザー姿だ
「なぁ、ここってパディアルク復活の中だよな」
「十中八九、そうだろう」
景色からするとアマメ村近くの草原だな
「とにかくステータスウィンドウでも見ようぜ」
「まずは俺から見てみるな」
どうやって出そう、ステータスウィンドウよ出ろ
出た！
『名前ヒロキ
ジョブ　アルカナファイツ
Ｌｖ　７７
ＨＰ３４２７／３４２７
ＭＰ５８４／５８４
攻撃力　１８５７
守備力　５６０
素早さ　８７０
回避　７０５
知恵　３３３
会心率　６８％
運　１１１
年齢　１７
性別　男

種族　人間』
「こんなもんか」
「「「やりすぎだろ！」」」「お前らどーよ」
『名前タクミ
ジョブ　ホワイトスペラー
Ｌｖ　７９
ＨＰ３０６２／３０６２
ＭＰ４９６３／４９６３
攻撃力　５１６
守備力　１９５８
素早さ　２０１５
回避　７９９
知恵　２８０５
会心率　７１％
運　２１３
年齢１７
性別男
種族人間」
「「十分凄いだろ！」」
「知恵高すぎねぇ？」
『名前ジュンヤ
ジョブ　ニンジャ
Ｌｖ　７５
ＨＰ３００８／３００８
ＭＰ６７２／６７２
攻撃力　９９５
守備力　９９９
素早さ　４３６５
回避　１０００
知恵　８５２

会心率　８８％
運　１９６
年齢１７
性別男
種族人間』
「「素早さ速すぎだろ！」」
「流石ニンジャ」
「最後は僕だね」
『名前レンヤ
ジョブ　マルチスペラー
Ｌｖ６９
ＨＰ２０６１／２０６１
ＭＰ２６５２／２６５２
攻撃力　３９５
守備力　５８０
素早さ　５０２
回避　７６９
知恵　１０９１
会心率　５０％
運　１３０
年齢１７
性別男
種族人間』
「「「普通だ～」」」
「お前らが凄すぎんだよ！！」
さて、と
「アイテムでも見てみるか」
「だな」
うわぁ～
「Ｇが１Ｇもないよ」

「苦労して手に入れた武器まで」
「Ｌｖ１スタートでなくて良かったね」
うんうん
「呪文はどうだろうか」
「試して見ろ出来るだけ弱いやつを」
「「わかった」」
大丈夫かな
「バギムーチョ！」
「サンダーボルト！」
「待ていや！俺は弱いのを使えと言ったはずだ！作品が違うし、しかも強すぎだ！」
「おふざけはこの位にして、アイスショット」
でた
「問題はないな」

『きゃぁぁぁ！！』
悲鳴！？
「あっちからだ」
げ、あれは！！

今までは凡人だったでも、俺はなるとこができたんだ！！魔導士に

あれは
「あのモンスターは確か、シールドタイガー
クイーンタイガーを守る、防御が高いモンスターだ」
「その前を見ろ！
女の子が」
「倒すぞ
ジュンヤ！女の子を」
「ＹＯ―了解♪りょりょ了解♪りょ了解♪」
「何してんだ？」
「俺のジョブはＭ―Ｊニンジャだ！」
「そんなジョブは無い！いいから早く」
「わ～ってる」
相変わらず早いよな
「行くぜ
かっ飛びやがれ！！
右ストレート」
シールドタイガーをおもいっきし殴ったらかなり飛んだよ
森の奥まで行ったな
「あ、Ｇだ拾うか」
「なぁ、ヒロキ飛ばすは良いけどあっちにはアマメ村があるんだよ
だよ」
「まぁＨＰは０だし、大丈夫っしょ」
「君、大丈夫？」
「あ、はい
助けていただきありがとうございます」
あり、お礼されちった
やっぱり感謝されることは慣れないな

「君、名前は？」
「レフィス。
レフィス・メルトです」
「レフィス・・・・さん？はアマメ村から来たのかい？」
「レフィスで良いです。はい、アマメ村から来ました」
このまま村まで行くか？
だがさっきからレンヤが「何？服装からして現地人？これ助けるってイベント？恋愛フラグ？」などとほざいていた
正直うるさい
「せっかくだし、村に行こうよ」
「何かわかるかもね」
レンヤを蚊帳の外で話を進める
「それと、はいこれ君の剣だろ？」
「うーむエターナルの人間が日本語喋るか。日本製だからまぁいいか」
レンヤよ、この子引いてるぞ
「あ、ありがとうございます。
それにしても凄いですねシールドタイガーを素手で倒すなんて」
「ヒロキはパワータイプだからね」
「うるさいぞ防御タイプ」
「あの～」
あ、忘れてた
「皆さんは旅の人ですか？見ない服装ですし」
（どうする？）
（外の世界から来たってバラすか？）
（（（アホか！））））
（どこから来たことにする？）
（極東か東方、どっちがいい？）
（極東で良いだろ、嘘は言ってないし）
この間わすが二秒

「俺達は極東から来た」
「ですが、武器はどうしたんですか？」
（タクミ、任せる）
（貸し一）
（しょうがない助かる）
この間わすが０．５秒
「武器は野宿の時にモンスターにＧごと盗まれた」
（こんなもんか？）
（上出来）
この間わすが（ｒｙ
「じゃあ、アマメ村に来ますか？」
「ありがたき気遣い感謝する」
「ふぇ、どうしたんですか！？」
「気にすんな、感謝する時のコイツはいつもこんな感じだ」

――アマメ村――
「ただいまー」
「ゲームとまんま同じだな」
「みたいだな」
「なんかイベントおこるかな？」
「レフィスちゃんと付き合いたい」
上からレフィス、タクミ、ジュンヤ、俺、レンヤだ
てか相変わらず女好きだな
何回フられてたっけ？
「レフィス、また無断で森に入りおって！」
「ジャンクが空からシールドタイガーが降ってきたとか言ってまし

た」
本当に飛んで来たんだ・・・・
「お父さん、私を助けてくれた人達、武器とGがモンスターに盗まれたんだって、どうにか出来ない？」
「皆様、娘を助けていただきありがとうございます」
「自分はヒロキと言います
娘さんのことは気にしないでください」
「どうも、タクミです」
「同じくジュンヤです」
「うわぁ～すげぇ～」
「「「自己紹介せんか！」」」
バシシシ
「どうも、レンヤと言います」
「お父さん、ヒロキさん凄いんだよ！シールドタイガーを一発でかっ飛ばしたんだよ！」
言っちゃった
「と言うことは」「はい、俺が殴り飛ばしました
それで何か壊れたのなら弁償、もしくは修理いたします」
なんとかなるかな？
「いえ、壊れた物はございません
私は村長と神官を務める
ラウドです
ここではみない服装です、皆様方は旅をしているのですか？」
（極東でいいよね？）
（（意義なｓ――））
「外の世界から来たんです」
あのバカ！
「は？外の世界？」
ほら皆混乱してんじゃん
（（諦めて説明しよう））

はぁ～しょうがない恨むぞレンヤ
「レンヤ、俺が説明する
ここは『パディアルクの復活』の世界ですよね？」
うわぁ～やっぱりみんな混乱してるよ
「よく意味がわかりません。パディアルク、とは？聞いたことあるような無いような。不思議な響きの単語ですが・・・・」
「えー、パディアルクとは、この世界に封印されし大魔王です。まだ封印されていますが、封印が解かれたら世界を滅ぼそうとするでしょう」
皆の視線が『何言ってんだコイツ』みたいになってる
結構キツい
「中の人にはよくわかって無いんだよ」
「よくわからない事があっても目をつむってください」
タクミ、ナイスフォロー
「我々４人は故郷にその言い伝えがあり、大婆様がパディアルクが復活しようとしていると予知され、村最強の４人で世界を救う旅を始めたのです」
ナイスなアドリブのはず
「うーむ、しかし」
「わかりました、今からステータスウィンドウをお見せします。そこから話の真偽を確かめてください」
ステータスウィンドウ出ろ
「こ、これは！！」

レフィスｓｉｄｅ
「我々４人は故郷にその言い伝えがあり、大婆様がパディアルクが復活しようとしていることを予知され、村最強の４人で世界を救う旅を始めたのです」

変な冗談だと思いき、笑おうと思った、でもシールドタイガーを一撃で倒した強さを見て笑えなくなった
「うーむ」
やっぱりお父さんはいまだに信じられてない
「わかりました、今からステータスウィンドウをお見せします。そこから話の真偽を確かめてください」
「こ、これは！！」
ステータスウィンドウを見て、皆が驚いた
だって
Ｌｖ７７とＬｖ７９とＬｖ７５とＬｖ６９だよ！

ヒロキｓｉｄｅ
「この数値は、人間離れしとる！
アルカナファイツですと？まさか、聖拳士アルカナの祝福を受けた拳士・・・・！なんと・・・・おお、なんという・・・・・。あなた方は何者ですか？まさか、神の使い・・・・？」
何だろう、うーむだどろっこしいな
「いえ、俺達はただゲーマーな学生ですよ」
「？？？」
「それは元の世界だろ、今は超ド級Ｌｖのアルカナファイツにホワイトスペラーさらにニンジャとマルチスペラー何だからな」
「俺は少し強いからってつけあがり、威張り散らす奴が嫌いだ」
「わりわり」
「お前らだから特別に許す」
「助かった」
「では、ぜひ、私の家に来てください。何も無い田舎ですがおもて

なしをいたします」
「御気を遣わずに、ただ寝床があれば良いです。」
「お父さん、４人部屋丁度余ってたよね？
ヒロキさん、家に来て旅の話を聞かせてよ」
「お世話になります」

「うをぉーデケー
やっぱりテレビ画面とは大違いだ」
「レンヤさんはここに来たことがあるのですか？」
「い、いえ、噂で聞いた程度です」
「この神殿には風の神、ウィンがまつられております
昔、ここに来た国王様が建ててくださったのじゃ」
「よい人だ・・・・・きっと民から好かれているでしょう」
「うむ、よい国王様だ」そうゆう人が国を納めるべきだよな
「ここが我が家です」
「立派なお屋敷ですね」
「流石部長を経験したことあるだけに礼儀正しいね♪」
からかうな
「ただいまー」
「今戻った」
「お帰りなさい」
「お帰り」
そして中から現れたのは2人の美女
「お父さん！なんで魔法使いと忍者を連れてきたの！？」
どうゆうことだ？
「失礼な事をゆうでない！この方々はレフィスを助けて下さったのだぞ」
「・・・・・ラウドさん

お二人方、あなた方に何があったのかは存じません。
ですが、ジョブが同じと言う理由で拒むのはどうかと思います。

すいません、説教みたいになってしまいましたね
自分はヒロキと申します」
「俺はタクミ」「同じくジュンヤ」
「僕はレンヤ
さっきの事だけど気にしてないからね」
「私はメルト家の長女のシクルです」
「次女のアリサですよろしくお願いします」
「立ち話も何ですからどうぞ中へ」
「中も立派ですね」「ありがとうございます」
「ねぇ、シクルさん、アリサさん。辛いかもしれないけど昔何があったの？」
「「・・・・・・・・・」」
「話せないなら話さなくて良いよ。人は何かしら秘密を持ってる」

「まぁお夕飯でもどうぞ」
「ありがとうございます」
『いただきます』
うまい！
「これは凄い！」
「レストランでも通用する」
「結婚する人は最高だろうな～」
上からジュンヤ、タクミ、レンヤだ
『ごちそう様でした』

「部屋行くぞ」

【この後、ヒロキ達一行に試練が待ち受ける事を彼らはまだ、知らない】

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6748z/

RPGの世界に入っちった

2012年1月1日01時48分発行